

オール小樽で有効活用を 北海製罐「第三倉庫」の未来

模索 三 図



◀「第三倉庫」の海側部分

小樽運河のランドマークともいべき歴史的建造物である北海製罐「第三倉庫」の保存へ向けて、官民一体による動きが活発化している。当初、会社側は老朽化を理由に解体の方針を打ち出していたが、倉庫に寄せる市民の並々ならぬ思いを受け、今秋、市に寄贈したうえ、商工会議所などが中心

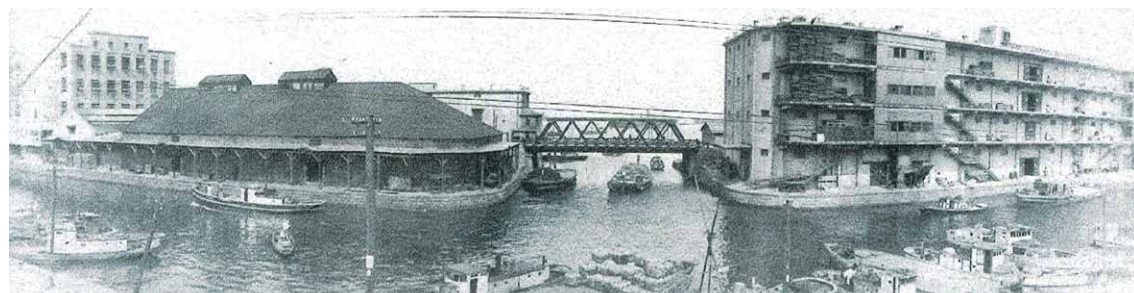
となり利活用の道を模索していくことになったもの。小樽市では7月に「北海道の『心臓』と呼ばれたまち小樽」が日本遺産候補に認定されたが、倉庫がある北運河地区の再開発計画ともリンクさせ、魅力的な観光ゾーンの形成を目指す考えだ。
(フリーライター・内海 達志)

小樽運河と歴史を共に

「北運河」と呼ばれる小樽運河の手宮寄りのエリアは、中心部と比べて観光客が少ないぶん、落ち着いた雰囲気にも包まれている。そのなかで異彩を放っているのが、鉄筋コンクリート4階建て、北海製罐が所有する「第三倉庫」だ。石畳の遊歩道から望むシルエットは美しく、多くの画家に描かれてきた。天気の良い日には、スケッチ

ブックを広げる市民も少なくない。本題に入る前に、まずは倉庫の歴史を簡単に振り返っておこう。北海製罐は今年10月、創業100年の節目を迎える。同社の前身は、1906（明治39）年に堤清六と平塚常次郎が新潟で興した「堤商会」だ。その歩みを紹介するだけでも壮大な物語になってしまうので詳細は割愛するが、

「第三倉庫」は会社設立（1921年）の3年後の1924（大正13）年に竣工した。運河の完成が1923年だから、両者はほぼ歴史を共にしてきたといっている。建坪549坪（延べ2196坪）。貯蔵能力は第一・第二倉庫を凌ぐ。スケールの大きさのみならず、当時の最先端技術を施した近代的な建物であり、運



▲昭和29年頃の風景（提供・北海製罐）

河に係留された船へ製品を下ろすためのスパイラルシユートが注目を集めた。残念ながら筆者は稼働時を知らないが、螺旋状のスロープを通り、上階から製品がクルクルと回りながら滑落するシーンは倉庫の名物となっていた。また、1928（昭和3）年の8月には、

小樽で100年の恩義

北運河の海側は、その大部分を北海製罐の関連施設が占めている。「第三倉庫」以外の工場棟や事務所棟など1935（昭和10）年にかけて建てられたもので、2012（平成24）年に小樽市指定歴史的建造物に登録され

た。レトロで重厚な建物が並ぶさまは圧巻だ。小樽工場長の渡部一雄氏に話をうかがった。「すでに倉庫としては5年前からは外壁の崩落が見られるようになったので、現在はネットで保護しています。



空缶の積み出し風景。舟に荷が積み込まれているのがみえる（提供・北海製罐）



続きは『月刊クオリティ』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)